アートな宿　板室温泉大黒屋

3/11/2015

北村社会福祉士事務所
代表　北村弘之

静まった山奥の小さな温泉街の中、本当に車が通ることができるのか、この橋。恐る恐る渡ると、そこはどうも宿の庭園らしい。玉砂利が敷いてあって進む方向は、雨のせいもあり、玄関先がわからない。少し前進すると右側に本日お世話になる宿の玄関があった。車を止めると宿の中から「いらっしゃいませ」の声。ここでよかったのだと一安心。敷地の中は舗装された道はなく、駐車場も玉砂利の上に停めた。

玄関は、他の宿と違って左右に開く「引き戸」、そして靴を脱ぐ上がり場。何もかも、アートで新鮮な感じを受けた最初の時間だった。

働く人は、皆さん若い。その一人が部屋へ案内してくれた。案内と言っても、非常口とか食事処の説明はないのだ。アートな宿と言っているので、まずサロンに置かれている絵や、展示物などの芸術品の説明なのである。このサロンでは定期的に音楽会等が開催されており、まさに人が集い、話をする空間になっている。私達がお世話になる部屋は、一番玄関から遠い「梅の館」の一室。長い廊下を飽きさせないための工夫なのか、ところどころに絵や器が置いてある。部屋に入ってまた驚き。この構造や作りは何なのだ。庭園と川と山を「どうぞご覧ください」と言わんばかりのテーブルの配置。何物にも代えがたいものであった。この思考は、サロンでの椅子の配置と庭園を観る感覚と同じであったことをあとで知った。

玄関入口

サロン

公募作品展

朝食後、そのサロンの椅子から外を観ていると、「ヤマガラ」が、餌の入っている鳥籠と、自分たちの住処である庭の樹の間を往復している光景に会った。その愛らしい姿に時を忘れ、見入っていると、宿の人が「お茶をどうぞ」と言って持ってきてくれた。何というもてなし方。若い人も含め働いている人は、時間に追われている感じはなく、それが建物全体の雰囲気と合わさって、客に乗り移ってくるような感じなのだ。

板室温泉全体に宿は、5～6 軒あるようだが、温泉場と言ってもネオンも色気も全くない。そこにある一軒の宿が今回の「大黒屋」さん。街も静か、宿も静か、本当に大人の宿である。

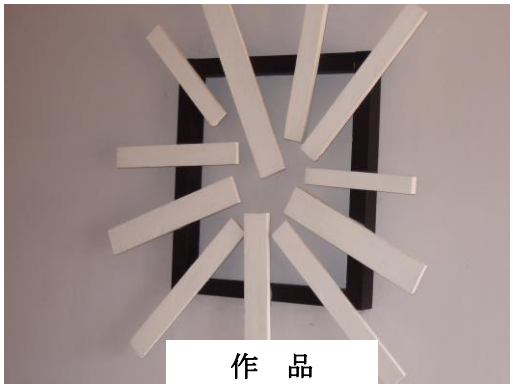
さて、宿のタイトルにある「保養とアート」を目指して、宿の経営をしているのが16 代目の経営者「室井俊二」氏。原点は、社長になってから仕事中に、お客様から「楽しく働いていないようだね」と言われたことにあるらしい。それでは「どのような人が楽しく働いているのですか」と室井氏が聞くと、「貧乏であるかもしれないけれど、芸術家は毎日楽しく仕事をしているよ」という返事が返ってきた。それからは、芸術を観に東京に出かけていったそうだ。

当の室井氏とは、ギャラリー散歩時にいろいろとお話を聞かせていただいた。ここまで来るには資金も大変だったけれど、優れた芸術家を見出して 10 年間資金と売り込みを提供してきたとのことだった。この芸術家こそ、現在では世界中で有名になった「菅　木志雄」さん(‘44 年生まれ)だ。現在でも毎日、作品を 2 点は

創作しているとのこと。室井氏は、菅さんのよいところをプロデュースして世に広めた立役者なのだ。室井氏は、こう言っていた。芸術家は、自分の作品はよいとわかっていても、それを世に知らしめる術や資金を持っていない。それを実現していくのが自分の役割だと。このようにして、現在も「作品公募」した中から20点ほどを宿に展示しているのだ。もう10年ほど続いており、今回入選した若い芸術家「佐貫　巧」氏と同宿となり言葉を交わすことができた。公募作品展中なので訪れたとのことだった。

宿で働いている人の身なりはきちんとしており、また若い人が多い。その多くは寮に住んで働き、アーティストを目指す人、ワインのソムリエを目指す人、コミニュケーションをうまくとれるように頑張っている若者もいた。多分、それは、室井氏という感性のある経営者の薫陶を受けたいという人が多いからではないかと思った。

3名ほどの若い人と話す機会があり、いろいろと教えてもらった。その中の一人から新人見習い期間が3か月あるというのを聞いた。自分がこの仕事に合うのか、合わないのかを見極める時間らしい。当然、サービス業だから合わない人もいるのだろう。


作　品

その中で、室井氏との1対1の面談が何回かあるらしい。

室井氏は、右にある作品を壁から外して持ってきて、「大黒屋の仕事を考えてみましょう。この黒い枠は、人間として、また働く場での基本的なものと考えて下さい。この時間に3年間ほどかかることでしょう。しかし、枠の中だけでは生きていけない。自分らしさや、自分の能力が発揮できるように自分を磨くことをしてもらいたい」と。何という、社員教育だろうか。

私は、「アートと保養」というよりは、「アートと感性を大切にした宿」の表現がよいのではないかと思ったりした。その室井氏と1時間ほどのギャラリー巡りの時間だったが、旅館経営、芸術家育て、働く人の育て方ともうまく回っていると思った。アートな宿のたたずまいだけでなく、経営者とその理念の下で働く人々の意識の高さがおもてなしになって現れ、リピート率70%の支持を得ているのだろう。

何という言葉

庭から見たサロン

送りだす玄関
音符のある渡り板

この宿に泊まってみたいと思ったのは、
「日本で一番大切にしたい会社」
　著:坂本光司を読んだことからです。
他参考本
山下柚実著:「客はアートでやってくる」

以上

大黒屋の経営理念
保養とアートの理念のもと、サービス精神と美意識を身に着け、満足と感動と安全を常に感が考えて行動する。
実行方法
・自己の部門に責任を持とう
・技術の向上に絶えず努力しよう
・挨拶、連絡、確認は忘れずに
・見だしなみ、態度、言葉に気をつかおう
・救命・防災訓練をしよう
・チャレンジ精神で常な向上しよう